

㊦ 丸字は配点

問一 ⑤自分と比べてときに自分自身が不幸ではないことを確認できるから。

問二 ③ウ

問三 ④ 先生…震災でたくさんの人の死に直面したことによる苦しみ。(25字)

④ マナミ…姉に惨めな思いをさせられ続けたことによる苦しみ。(24字)

問四 ③ウ

問五 ④イ

問六 ②ア

問七 ③エ

問八 ③イ

問九 ⑤惨めですくわれることがなく、やり直しの資格もない存在。(27字)

問一〇 ④エ

㊦ 小説

出典は木皿 泉「カゲロボ」。出版社勤めのマナミは、担当している小説家「神山聖子(先生)」の妹「里枝」から聖子の薬殺依頼を受ける。そんなとき「阪神淡路大震災」が起きてマナミは聖子の家に行った。そこでマナミと聖子が話している中で、聖子が「空豆」の話を持ち出す。

問一 人の不幸を笑う空豆の気持ちがかかるという先生の気持ちを、自分なりに考えて答える。「他人の不幸を見ると、自分の不幸ではない状況を確認できて安心する」という説明をしてほしい。「他人も自分も不幸だから安心する」「自分がみじめだから他人の不幸に安心する」という解答が多く見られた。また、「嫌な(恨んでいる)相手が不幸になってよかった」という「恨みを晴らした」という内容の解答も少なからずあった。

問二 出版社につとめるマナミが、担当の先生に対してどのように接してきたかを考える。傍線部直前の先生の状況と、傍線部直後の「私が何とかせねば」という言葉などから選択肢をしぼるとよい。アは「先生にあきれつつ」イは「先生を教え導き」以後が正しくない。エの「大胆な行動」や「優しく見守る」などは本文に記述がないので不正解。

問三 先生の「傷口」は震災との関わり、マナミの「傷口」は姉との関わりで説明できる。先生については、「妹に殺されそうになった悲しみ」など、マナミについては、「先生を薬殺することを引き受けてしまった心の痛み」などの誤答があった。

問四 傍線部の前に、マナミが姉へのコンプレックスで惨めな思いをしてきたエピソードがあり、傍線部の場面ではマナミが「鼻が詰まって返事ができなかった」とあることから、マナミの暗い心に先生の言葉は優しく届いたことがわかる。アは、「ちょうど考えていたことを…はっきりと言いつけてくれた」と判断できる部分がない。イは、マナミは「つらい経験」を先生に話していない。エは、マナミが何度もうなずいていて「うわの空」とはいえないことから不正解。

問五 阪神淡路大震災の直後、人々が体験した悲惨さの中で、発電機の光は人々に希望を与える明かりとなった。それと同時にその光は、裁縫セットで傷口を縫うという使命を思い出した先生と、その先生を支え、裁縫セットを渡したマナミにも勇気を与えるような明かりであり、二人の胸にも喜びがこみ上げた、という内容である。アは、「人々の不屈の精神」を思わせる記述がないことと、「文筆という手段を捨てて」という箇所が間違いである。ウの「鎮魂の心」はここでは当てはまらず、「人々を悼む作品」については記述がない。エの「絶望視されている人々の生存」は記述されていない。「致命的な『傷口』」についても心の傷とは違うので誤り。

問六 先生の薬殺を依頼したのが先生の妹だということに、先生は気づいているのではないか、というマナミの思いが、括弧の前の会話において確認できる。

問七 身内に裏切られたことをはっきり先生は口に出したあと、布団をかぶる。そして、布団の中で「私がそう思わない限り傷つかない。傷つくのは、自分自身が惨めだと思ったときだけ」とあえて言っている。ここから、本当はショックを受けていることを読み取る。布団をかぶるのはそれを覚られないようにする行動である。ア「絶対に自分自身が惨めであることを認めまいとする」は文脈に合わない。イ「わざと無視している」わけではない。ウ「マナミへの感謝を、あえて見せないように」という点が違う。

問八 空豆のエピソードから「惨め」とはどういうことを考える。空豆は炭とワラに裏切られ、食べられそうになるが未遂で終わる。先生の会話の中の「もしかすると空豆はそれを知って自分を惨めだと思ったのではないか。だから人の不幸を笑ったんだ」とある部分が直接の指示内容である。

問九 傍線部の直前の会話から、空豆は「自分のことを惨めだと思っている」、「すくわれないやつ」だとわかる。マナミは旅人にやり直す機会をもらった空豆と自分を比べて、自分には「やり直す資格などない」と言っていることとまとめて、マナミが自分自身をどう思っているかを答えればよい。空豆と同じくマナミも「惨め」で「すくわれない」となるが、マナミは空豆のように人の不幸を笑うわけではなく、先生のように身近な存在に裏切られているわけではないことには注意して欲しい。

問一〇 傍線部の後には、マナミが今日歩いてきた、阪神淡路大震災に被災した街の風景についての記述がある。その中に、「こんなにおびただしい傷を縫うことなんてできるのだろうか。でも、ここにいる人たちはやるのだろうか…生きるということは、その繰り返し」とあり、先生は最後に「とにかく縫う」と言う。それらの文脈から、解答はマナミや先生だけのことではなく、人が生きるということについて記述しているエが適当である。